

●令和3年度一般選抜後期日程試験講評（小論文）

【後期小論文課題の基本的な姿勢】

宮崎公立大学国際文化学科が行う総合学力試験として、以下の4点を念頭に置いて作題した。

1. 現代社会における主要な問題であり、かつ多様な解釈ができるテーマであること
2. 内容の正確な理解に加え、得られた情報を的確に活用する能力を問う課題であること
3. 偏見が散見されるセンシティブな課題であり、自身の考えを客観的に見つめる批判的思考が求められる課題であること
4. 根拠のない主義主張の羅列ではなく、課題文や自身が有する知見に基づいて、論理的に表現する技能と態度を問う課題であること

(1)方法

本年度の小論文課題は、現代の青少年層における自己及び社会に対する意識を主題とし、日本の若者の特徴について、令和元年度「子供・若者白書」記載の比較データ(資料1)から、世界の若者との違いとして読み取りを行ったうえで、専門家による論述(資料2)を手掛かりに、その背景なす社会と若者の関係について論じるものであった。

この課題は、世間一般に言われている「若者像」「社会像」にとらわれることなく、客観的なデータや論理的思考に基づいて考えることで、提示された作題の意図を適切に理解できているか、提示された情報を適切に読み取る分析的な視点を持ち、自分の主張を他者の主張と比較し論理的に構築し表現する文章力を持っているかを確認するものとして作成された。

また、敢えて受験者が当事者となる若者世代の問題を課題とすることで、本学がアドミッション・ポリシーとして挙げている、国際社会の課題の探究と解決への主体的な取り組みにおいて重要となる学力、すなわち余談と偏見にとらわれない客観的な認識力、単なる主観の表明ではない、論理的な思考力に基づく考察力を確認するものである。

(2)結果に関する講評

まず、グラフの示す各データについては、多くの受験生が大きな間違いをすることなく、おおよそにおいて正確に読み取れてはいた。ただし、どの程度詳細について具体的に記述するかについては違いが見られた。

論述すべき課題の中心はあくまで自身の考えを記述するところであり、全体字数にも制限(800字程度)があることから、データの読み取りについては、いかに少ない字数で必要なことを漏らさずに記述できるかが重要であった。そしてその際重要となるの

は、日本の若者の特徴についての全体傾向を端的にまとめつつ、論述の根拠として有効なデータについてはある程度詳細に指摘するという、取捨選択の判断である。今回、論旨に即した適切な判断による論述も見受けられたが、受験生によっては、記述の大半をグラフの読み取りに費やし、考察部分がほとんど書けていない論述や、短く要約しすぎて必要な情報が記述されていない論述も散見された。

次に、今回の課題は若者の積極性や自己肯定感の低さの原因について、社会との繋がりの中かで議論することを期待したものであるが、この点については、資料 2 に挙げた専門家による知見に対して、受験生自身がどのような見解にあるのかを考え、論述するうえでどこを盛り込めばよいのか、あるいはどう批判すればよいのかを判断することが重要であった。

しかし、この点についても資料①の扱い方と同様の傾向が見受けられた。受験生自身がそのような判断を行った様子が論述にしっかりと表れている答案があった一方で、資料文章の要約に必要以上に分量を費やす記述や、逆にほとんど資料文章に触れていない記述も見受けられた。また少数ではあるが、受験生自身の主張に対して、無関係と思われる個所を要約していたり、つじつまが合わない引用を行っていたりする答案もあった。ただし、中には資料②だけでなく、①に記載されたデータの詳細を読み解くことで、社会とのかかわりに対する考察をより深めようと試みたものもいくつかあり、その中でも全体の論理性がしっかりしたものについては、高い評価を与えている。

また今回の出題は、所謂青少年問題の類に係る課題であり、その意味では受験生自身が当事者である問題であった。このことから、今回は自身の個人的経験を引き合いにした社会批判的な論述や、個人的思いのみを根拠とした当為命題的な論述が数多く見受けられた。

個人経験の例示は、論述全体が論理的な記述に徹し、なおかつ論理構造上の確なものである場合、主張の説得力を増すことが多い。しかしそのような展開が十分にできていない場合、全体論旨の明確さを損ない、場合によっては論旨全体を個人的な感情や感傷に陥らせ、論理性を欠いた単なる主観の表明主張に終始させてしまう。今回の論述において、個人経験の提示の仕方に優れたものも見受けられたが、残念ながら個人経験からくる感情的・感傷的な論述も少なからず存在した。

一方当為命題的な記述(「～ねばならない」「～すべきだ」という記述)については、課題に即した論考が十分に果たされたのちに、まとめの一部として使われる限りでは構わないが、論考のプロセスの途中で使われる場合には、論理的展開の阻害要因となることが多い(今回の出題で言えば、論述の早い段階で安易に「若者は自分たちに対してもっと自信を持つべきだと自分は思う」「大人はもっと若者に理解を示すべきだと思う」と主張するのではなく、まずは他国の若者と比べ、若者たちが自分のどの部分にどう自信がないのか、あるいは「大人たちの不理解」と考えられる現象はどのようなもので、それはどのような要因によるのかなどを論理的に考察することが求められる)。今回の受験者に、そのような整理ができていなかったものも少なからずいた点を指摘しておきたい。

最後に、例年の指摘となっていることであるが、課題の趣旨に即した答案になっていないケースが今回も少なからず見受けられた。今回の出題意図はあくまで「原因は

なにか」を考察することであり、「問題をいかに解決するか」ではない。問題解決の提言を主題に論述した答案については、高い評点に繋がらないことに留意していただきたい。

いずれにせよ小論文課題においては、しっかりした論理的な思考に基づいた主張を、いかに的確に表現するかが問われる。論文を作成するうえで、まずは出題意図を正しくとらえ、受験生自身の主張とその論拠に留意して、論全体の構成を考えてほしい。その上で、資料を正確に読み、盛り込むべき要素はなにか、論述のどの部分に組み込めば有効かを考え、論理的な論述に徹底していただきたい。

今回も、以上の点において十分に留意し議論の展開をしている、もしくは展開しようとしている受験生については高い評価を与えた。